〝停滞〟を憎み、〝変化〟を好む

『変化は、これを好むが、停滞は、これを憎む』。私が大阪市立林寺小学校を卒業する時に、担任の中川有信先生が、サイン帳に書いてくれた言葉です。そのサイン帳がどこにあるのか、今は分かりません。しかし、なぜかその言葉が、私の心の中にしっかりと留まっています。もう、六十年も前のことです。

小学校の先生の教えを肝に銘じてきたわけではありませんが、私の人生、常に「変化」を求めてきたように思います。『変化』は、真理です。即ち、この世に存在するすべてのものは、変化しているのです。私達の命も、生まれた瞬間から刻々と最後に向かって短くなっています。庭に咲く花も、一刻として同じことはありません。万物は生々流転するのが真理であるすれば、私達のやることも、自然の摂理に即して、常に「変化」しなければならないのです。

余りにも変らない入社式風景に愕然

そのことを痛切に感じたのは、四月一日、ある会社の入社式に参加した時のことです。四百人近い新入社員が並ぶ、その後ろに私は座りました。式の後の講演会で、講演をさせていただくことになっていたため、入社式の空気を感じておきたいと思ったからです。そして、ふと、私は、自分の入社式を思い起こしました。「そうか、ちょうど五十年前か」と感慨にふけると共に、「あの頃も今も何も変わらないな」と思いました。幹部の登場、手を膝の上に置いて背筋を伸ばす緊張の新入社員達、やがて社長の祝辞、幹部紹介と続きます。懐かしいと思うと共に、「変化しないこと」に対して、いささかの疑問を感じたことは事実です。

すべてオリジナルでなければならない

私が主宰する『夢甲斐塾』も、『青年塾』も、入塾式に際して常に、「変化」を求めてきました。だから、毎年、開催場所も異なるし、内容や趣向も違います。すべて、〝オリジナル〟です。とにかく、「昨年と同じ事をしてはいけない、縦並び禁止」、「よそと同じことをしてはいけない、横並び禁止」だから、毎年、すべて一から自分達で考えなければならないのです。私は、それこそが、『創造と革新』の始まりであり、教育の第一歩と思っています。

例えば、今年度の『青年塾』の入塾式、西クラスは、大宰府で行い、関西クラスは、岐阜・関ヶ原で行いました。他のクラスはこれからです。大宰府での入塾式は、決意を手製の絵馬に書いて発表しました。関ヶ原での入塾式では、会場全体を戦場の陣地のようにしつらえて、スタッフの衣装は甲冑、ホラ貝を使って決意表明の合図をするなど、実に楽しいものでした。「より良いものに挑戦すること」こそ、『創造と革新』への道です。常に自らの頭で考えて、挑戦するところに、「達成の喜び」が湧きます。

夢甲斐塾　塾長　上甲　晃